

書 評

塚田秀雄訳著：『ラップランドの自然と人ーリンネのフィールドノートからー』古今書院，2020年刊，262p，6,000円（税別）

本書は興味深い一冊である。この本を手にするれば誰でも気づくことであるが、「訳著」となっている。つまり、本書は翻訳本であるし、著書ということである。この謎は本書を読み進めればすぐに解き明かされる。本書の「はじめに」に記されているように、ラップランドの入り口の町ウーメオのアカデミーが刊行したカール・フォン・リンネの「ラップランド紀行」に基づきながら、それをリンネのフィールドノートとして捉え、それを単に翻訳するのではなく、さまざまに解説や考察を著者なりに加えている。その意味で、本書は単なる翻訳本ではなく、立派な著書といえる。また、訳著者が本書を出版しようとした動機も興味深い。それは、先に述べたアカデミー版の「ラップランド紀行」が一般に出回っている英訳本の「ラップランド紀行」と異なっていたことであった。普及本としての英訳の「ラップランド紀行」が旅行記や旅行文学として興味をそそるだけのものではあったが、アカデミーで刊行されたものは学術的な内容や地域で収集した事物のスケッチが含まれ、博物学や地誌学の原資料となるフィールドノートとして重要な意味をもっていた。

訳著者が興味をもったフィールドノートとしての「ラップランド紀行」に基づいて、本書ではラップランドの自然と人びととの関係や生活文化が説明されている。評者は同じ訳著者による「カール・フォン・リンネの地域誌」を読み、リンネの地誌学的な記載とそれに基づく体系化の仕方に地理学の研究者やフィールドワーカーとして

の真髓をみていた。そのことを思い出しながら本書を読み進めていくと、訳著者が本書を出版するもう一つの動機に気づくことができる。本来、リンネはフィールドワークで収集した事実を体系的にまとめ、見事なまでに合理的に分類していたはずである。しかし、「ラップランドの紀行」のフィールドノートは見聞きしたさまざまな事実を無造作に記録し、決して体系的にまとめられているわけではなかった。このようなフィールドワーカーの原点が垣間見えるリルケの考え方を知りたいということが、訳著者のもう一つの出版動機といえる。

本書の目次は、「本書の現代的意義」にはじまり、次いで「はじめに」において、リンネのフィールドノートの概要が説明されている。それらの後に、「ラップランド紀行」の冒頭文があり、次いで「ラップランド紀行」のフィールドノートがそのまま日時の経過とともに掲載されている。掲載されているのは、ヴォエステルボッテン（5月24日～29日）、リュクセル・ラップマルク（5月30日～6月5日）、ビーテオ県（6月13日～21日）、ルーレオ県（6月22日～28日）ルーレ・ラップマルク（6月29日）、ヨックモック（6月30日～7月5日）、高山地域（7月6日～11日）、ノルウェー（7月12日～15日）、トールネオ（8月3日～）である。最後に、「あとがきに代えて」において、「ラップランド紀行」を読んだ訳著者の解題が他のリルケの著書「自然の体系」と「ラップランド植物誌」を踏まえて説明されている。

冒頭で述べられている本書の現代的意義は、科学史としての意義と18世紀後半における北欧の同時代的な史料としての意義に分けられている。前者の意義に関しては、フィールドノートに何が

書かれていたのかという素朴な疑問から出発し、フィールドノートという素材から何を取捨選択して後世に残すべき理論を構築してきたのかという考察に発展している。実際、素材からの取捨選択は事実と理論の相克という問題を孕んでおり、フィールドワーカーにとっての宿命的な課題でもある。リルケもフィールドノートとしての「ラップランド紀行」から「ラップランド植物誌」という完成形として学術書を出版している。そこでの事実の切り取り方を探ることが本書の重要な意義の一つであることは訳著者が繰り返し強調している点であり、評者も同意する点である。一方、後者の意義に関しては誰の目でも重要な博物学的な史料であり、民俗学的な史料であることは疑いない事実である。それは、リルケの緻密な観察眼と深長な洞察力、および勤勉な記録癖に基づくものだからである。そして、本書の「ラップランド紀行」を読んでわかったことであるが、リルケの強靱な体力と気力も意義深い資料の作成に必要なことであったといえる。というのは、リルケがほとんど休みなく、毎日、資料収集のために歩き回って記録し続けていた様子が本書からわかるからである。

「はじめに－リンネのフィールドノート」では、本書の位置づけがリンネの履歴とともに説明されている。少年時代から植物好きであったリンネが医師を志してルンド大学で学び始めたが、1年でウップサーラ大学に転じて植物誌の研究を始めるようになる。リンネの緻密な観察眼と深長な洞察力はウップサーラ大学時代に芽生え、25歳の時のラップランドの調査旅行で開花する。しかし、リルケの観察眼と洞察力の種はスウェーデン南部の高原地域のスモーランド地方の寒村ですでに蒔かれていた。リルケは草木を愛した牧師の子として生まれ、自然の他にほとんど何もない条件不利地の寒村で育ったことにより、身の回りの自然

をいろいろな側面から観察できる目が養われてきた。また、条件不利地の寒村での生活や遊びは体力づくりや精神力づくりにも役立ち、出発から帰着までの5か月間、総移動距離6,600kmにおよぶ調査旅行を続けるための源にもなった。

リルケの調査旅行の携帯品も記載されており、携行品はフォリオ紙（記録・標本用）や下着、猟銃、物差し、乗馬用の鞭などであり、意外に軽装備であった。このような調査旅行の携行品を訳著者がフンボルトの中南米の調査旅行と比較しており、非常に興味深い。フンボルトは豊かな資金に恵まれ、周到に計画準備し、長期間（5年間）にわたって調査し、さまざまな計測機器を用いて物理的、化学的な要因を明らかにしながら観察結果を説明してきた。しかし、リルケは満足な計測機器を携帯することなく調査を行い、フンボルトの観察結果と同じような成果を得ることができている。まさに、このことがリルケに興味をもち、リルケのフィールドノートに関心を持つようになった評者の動機でもある。

本書には本扉裏に行程図が掲載されている。この行程図は「ラップランド紀行」を読むにあたり、当該地域の土地勘がほとんどない読者にとって大きな助けとなる。行程図によれば、リルケはボツニア海をひと回りすることで調査旅行を行っているが、調査の中心はウーメオとルーレオ、およびトールネオから河川を遡っての流域の調査である。これらの流域の調査のなかでも、ルールオからの流域の調査は国境の山稜を超えてノルウェーまで及んでいることがわかる。さらに、これらの流域の調査では河谷が深く、急峻な山岳に阻まれて横断することができず、流域の往路を戻っていることもわかる。行程図だけを見ても、リルケの「ラップランド紀行」がさまざまな障害を克服しながら日々の出来事や事物の観察を記録していたことが理解できる。

リルケによる「ラップランド紀行」の記述は日記形式で、その日に観察したもの、経験したこと、食べたものなどを時間的な経過とともに紹介されている。例えば、5月29日の記述では、ウーメオ川の支流を日の出前から遡る様子が描かれ、川の流れの様子を五感で感じたままを記録するとともに、河川の兩岸の植生や鳥類の様子も観察して記録されている。記録の際、岸辺のハチドリ足の爪がスケッチされており、「足には指が4本あり、後ろのもっとも小さな指は薄い膜で外側の2本とつながっている」という特徴の説明がある。つまり、リルケはスケッチと説明を組み合わせることにより、観察した現象や事象をわかりやすく、臨場感をもって読者に伝えている。このようなことは、多くの地理学者が観察した現象や事象の写真と組み合わせて説明することと同じであるが、写真とスケッチでは大きな違いがある。写真は一瞬で現象や事象を切り取ることができるが、スケッチは十分に観察しなければ現象や事象を切り取ることができない。リルケのスケッチにこそ、彼の観察眼と洞察力が反映されているといえる。

5月29日の記述はさらに続き、リルケは川沿いで若いフクロウ2羽が吊り下げられている姿を見て、その理由を地元民の船頭に尋ねている。それは、カモの卵を得る仕掛け（スケッチ有）で、フクロウではなく若いカモであることも記録されている。次いで、朝食でオオライチョウの干し肉を食べたことや、網を仕掛けてカワカマスの漁をしたことなどが記録されている。また、ボートで網を使ってウミアイサを捕えてことも記録され、その嘴や鼻孔などの形態的な特徴が詳しくスケッチとともに記録されている。リルケのスケッチは動植物だけでなく、ラップランドの人びとの衣食住、および地域のランドマーク的な景観や特徴的な地層（露頭）など多岐にわたっており、総花的と批判されるかもしれないが、ラップランドのさ

まざまな情報が「ラップランド紀行」には詰め込まれている。それらの記録のなかで、関心のあるものや必要なものを抽出して活用することが、リルケの後に続く研究者に必要なことになる。

リルケが残した「ラップランド紀行」の旅行記録を読んでみると、このような旅行記録をどこかで読んだ記憶がよみがえってくる。それは、江戸時代後期（1841年）に出版された鈴木牧之の「北越雪譜」である。リルケと鈴木牧之は活躍した場所も時代も異なるが、「ラップランド紀行」と「北越雪譜」は同じ匂いがする書物であり、フィールドワーカーにとって手本とすべき書物である。「北越雪譜」は雪国の風俗、暮らし、文化、産業（特に縮について）などがスケッチとともに説明されており、資料的価値の高い書物である。リルケと同様に、鈴木牧之は緻密な観察眼と深長な洞察力で雪国の現象や事象を総花的に記録しており、それは「北越雪譜」が雪国の百科事典といわれる所以である。このような百科事典としての性格は、後世の研究者が詳細な記載記録から必要なものを選択して活用できるという利点となっている。

リルケは「ラップランド紀行」の後に、彼の集大成というべき「ラップランド植物誌」を著すことになる。訳著者が本書を出版する意義のところで気にかけていた、「ラップランド植物誌」に「ラップランド紀行」の何が書かれ、何が書かれていなかったのかの答えは本書を読むことによりわかるかもしれない。読後の評者の答えは訳著者の答えと異なるかもしれないが、リルケは「ラップランド紀行」のすべてを「ラップランド植物誌」や後の著作に残しているというものである。確かに、書かれていないものは明らかであり、すべて書かれているというのは評者の妄想かもしれない。しかし、「ラップランド紀行」の5か月間に培われた観察眼と洞察力、および記載力と勤勉

さは、その後の著作や研究に生かされており、その意味で評者はすべて書かれていたと考える。本書は、リルケというフィールドワーカーの原点というべき「ラップランド紀行」を紹介しており、フィールドワークにおいて大切なものを気づかせてくれる一冊である。評者も写真を撮ってフィールドワークが終わったつもりになっていた姿勢を反省し、リルケを見習ってスケッチを活用して地域の現象や事象を少しは詳しく説明しようと思う。

(菊地俊夫)

[付記]

書評本文中の地名は、原著の表記を採用した。